

2025/4/16

中経 論壇

経営支援
NPO クラブ 監事
仁 吉田



が、これは、庶民の権力者に対する決死のデールである。

このような凄絶なデール

若いころ、森鷗外の「最後の一句」を読んだ時、庶民の権力に対する痛烈な皮肉として印象に残った。「お上の事には間違いはございますまいから」と幼い娘に言わせることによつて、鷗外は権力の無謬性を理想としたと思つたのである。なぜ娘はお白洲に座

に比べ、なんとも安易なデールが、世界で最高の権力者によつてなされている。紛争の停戦の仲介に当たつて、侵略された小国に寄り添うどころか、強者たる大国の肩を持つような態度は、社会正義に基づくデールとは言えない。

である。なぜ娘はお白洲に座することにたつたのか、あらずじは忘れていたが、最近読み返してみると、この言葉は、自分たちの命と引き換えに、父親の命を助けてほしいと、娘たちが奉行所に願ひ出たときのものである。鷗外は、献身の中にある反抗を見ている

さらに侵略への抵抗に対する支援だつたはずが、それまでの支援の経費を倍にして返せ、というようなデールにはあきれるばかりである。紛争の仲介だけでなく、経済の面でも関税というツールを使って、全世界にデールを仕掛けていく。戦後の世代であ

大国のデールに思うこと

る私は、正直アメリカ力に対する尊敬と憧れを持つていた。黒人問題などあるもの、もともと移民の国であるアメリカは、多様性を重んじ、自由と民主主義の旗手として世界に貢献する姿勢を示してきたと評価していたのだ。

は深刻な健康被害がでているという。災害時の支援と同じ人道上の観点から、富める国が、貧しい国を無償で支援してきたのではなかったか。この視点を欠いた損得勘定だけのデールがまかり通ると、世界は弱肉強食の時代に舞い戻ることになる。

こうした評価が揺らいだのは、地球温暖化はフェイクだと言つて、パリ協定から離脱したことであるが、すべてをデールで解決するといふ権威も威厳もない態度に強烈な違和感を覚える。また、政府の経費削減として国際援助を取りやめたことにより、アフリカなどの途上国で

「最後の一句」の結末は、父親は死罪を免れ、追放刑で済むのだ。娘らの嘆願が功を奏した結果と読み取れる。権力への抵抗が事態を変えることになつた。一方、大国のデールは、はたして何をもちますのか？ 大国の横暴に対して警鐘を鳴らすのは、メディアの役割である。交流サイト(SNS)の登場によつて、新聞やテレビはオールドメディアなどと呼ばれるが、事実と正当な意見を組織として発信する媒体は、フェイクニュースが蔓延し、デールだけが横行する中で重要な存在であり、今後も色あせることはないと思う。報道機関には、社会の木鐸として、不当な権力者に対して批判の声を挙げ続けるよう願っている。

権威も威厳もない態度に強烈な違和感